

学生の教職観と教育実習観についての一考察

—教育実習前後のパネル調査を通して—

A Study on the View of Teaching Profession and Practical training with Students
—through the panelsurvey at the front and back of Practical training—

松 浦 善 満 (教育実践研究指導センター)

Yoshimitsu MATSUURA

抄録 教育実習を経験することにより、学生の教職観と教育実習観がどのように推移するのかを同一質問紙による調査結果から考察した。

その結果、教職観、教育実習観とも価値意識に関しては実習体験によっても前後の意識に大きな違いは見られないが、教職志望、子ども観、並びに教育実習のイメージに関しては一定の変化がみられた。これらの結果は教育実習改革のみならず教員養成の在り方を検討するうえでも役立つ資料である。

キーワード：教師教育、教育実習、教職観

はじめに

教育実習に関する研究は数多いが、その内容はおよそ二つに分れる。その一つは教育実習の内容そのものをどの様に組み立てればよいのかといった実習のカリキュラムとその方法である。例えば近年では教育実習の事前・事後指導カリキュラムとその方法に関する研究が各大学の教育学部で行なわれている。また以前にはマイクロティーティングを取入れたり、視聴覚器材を利用した実践的な教育実習の在り方の開発研究も盛んであった。^{注1)}

第二は、教育実習を通して学生の意識変化や教職観の変化を実態調査し実習の及ぼす影響や効果を研究することも以前から行なわれてきた。^{注2)}

前者が、教育実習への実践的アプローチであるのに対して、後者は、教育実習への基礎的アプローチとも言える。

本研究は、教育実習をとおして学生の教職観や教育実習観がどのように変化するのかについてその資料を得ることを目的にした、教育実習の基礎的研究である。

全国の教員養成学部の教育実習が4年生から3年生へと移行しているが、本学でもすでに今年で4年目を迎えている。そこで、教育実習改革の効果と課題を明らかにするために、教育実習シンポジウムや各種のアンケート調査をおこなってきたが、その主要な狙いは、教育実習で得た問題意識をその後の大学での研究や将来の教職生活にどのように生かすことができるかにあった。

本報告も教育実習を前後して行なった同一内容によるパネル調査のデータを比較するこ

とによって、学生の実習観と教職観との変化を見ることにより教育実習の今後の在り方に基礎資料を得る事を目的にしている。

さらに、学生の教職観や教育実習観を明らかにすることは、広い意味でこれからの教師教育、教員養成にとって役立つ資料を提供するものだと考える。

1. 研究の方法—研究仮説と方法—

研究仮説は以下の3点である。

- ① 教育実習を経験することにより学生の教育実習観、教職観に何等かの変化が見られるだろう。
- ② とくに教職志望意識に変化がみられるだろう。
- ③ 教育実習体験が今後の大学生活への何等かの影響をもたらすであろう。

研究方法は、実習生を対象にした同一質問紙によるパネル調査と教育実習事後指導におけるアンケート調査結果を分析する。

簡単に調査対象と調査の手続きを示す。

- (1) 調査対象：和歌山大学教育学部三回生（教育実習参加学生）、並びに四回生の一部（B課程の教員免許取得希望者）
- (2) 調査時期
 - ① パネル調査に関しては大学での事前・事後指導において実施
1995. 2. 23（第1回事前指導日：於、大学）
1995. 12. 7（第3回事後指導日：於、大学）
 - ② 実習アンケートは附属学校並びに実習協力校で実施
- (3) 調査方法 いずれもアンケートによる自記式で、パネル調査は松浦が実施。実習校でのアンケート調査は実習担当教員をとおして実施。
- (4) 調査票 後掲するが、教職観（B-1）は岸田元美氏が作成、高旗正人氏が改正した「古賀—サーストーン法」による態度尺度を利用した。^{注3)}
教職志望（A）に関して今栄国晴氏の調査項目を参照した。^{注4)}

2. 調査結果

(1) 被調査者の属性

① 被調査者の内訳

教育実習前後のパネル調査は同一人から調査することを原則にしているのので、どちらか一方の調査に参加しなかった学生は調査実数から省いた。したがって、表1にみるように162名が実習前後の両方の調査に回答した人数である。

表1 被調査者の内訳

実習校		附属小	雑賀小	附属中	出身中学	合計
男子	人数	35	16	20	6	77
	%	(45.4)	(20.8)	(26.0)	(7.8)	(47.5)
女子	人数	33	18	21	13	85
	%	(38.8)	(21.2)	(24.7)	(15.3)	(52.5)
合計	人数	68	34	41	19	162
	%	(42.9)	(21.0)	(25.3)	(11.7)	(100.0)

② 実習生と教職関係者

実習生に「現在、あるいは過去にあなたの両親や祖父母、兄弟、あるいは親戚に教職に就いている人がいますか。」と尋ねた。その結果は図1にみるように46%の学生の関係者（血縁関係）に教職関係者がいることがわかった。（複数回答であるため100%にはならない。）

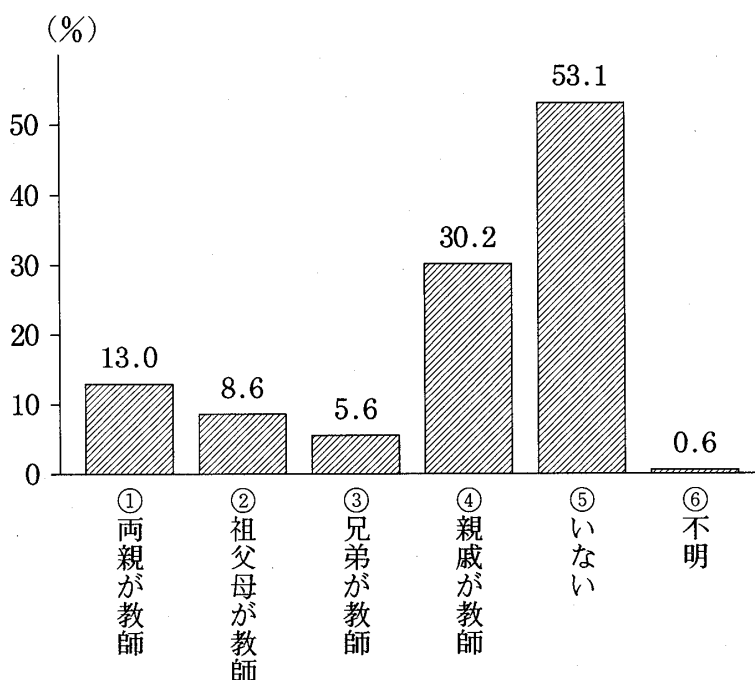


図1 実習生の教職関係者の有無

(2) 実習前後の教職志望傾向

教職志望について「どうしても教職につきたい」から「どうしても他職につきたい」までの6段階、並びに「いまのところ特に考えていない、わからない」を含め7つの選択肢をもちいて尋ねてみた。

その結果、図2にみるように、教育実習後「どうしても教職につきたい」という強い教職願望は12.3%から18.5%へとやや増加しているものの、これは「教職につきたいが場合によっては教育に関係した職業でもよい」とする学生が若干減ったことによるもので全体的に教職志望が強まったとは言えない。というのは「できれば教職以外の職業につきたい」あるいは「どうしても教職以外の職業」といった教職志望を拒否する学生は実習前後においてほとんど変化していないことから言える。

このような結果から教育実習を体験することにより、意識の強い教職志望者がやや増加するものの学生の教職志望の全体傾向そのものを大幅に変化させるものではないと思われる。

表2 教職志望の変化 (数字は%)

	実習前	→	実習後
① どうしても教職につきたい。	12.3	→	18.5*
② 教職につきたいが、場合によっては教育に 関係した職業でもよい。	24.1	→	19.8*
③ 教職につきたいが、場合によっては一般の 職業でもよい。	25.9	→	21.0*
④ 教職でも、他の職業でもどちらでもよい。	12.3	→	15.4
⑤ できれば教職以外の仕事につきたいが、場 合によっては教職でもよい。	14.2	→	10.5*
⑥ どうしても教職以外の職業につきたい。	3.7	→	6.8*
⑦ いまのところ考えていない。	7.4	→	8.0

(3) 教職観は変化するか

学生は教職をどのように考えているのであろうか。ここでは岸田(1952)らがかかなり以前から活用し、最近、高旗(1990)らが改定した教職観に関するアイテムを使い調査した。19項目にわたって賛成できるものに複数回答してもらった結果を図2にまとめている。全体的には「3.教職は特別な職業ではない」、「10.教職は次の社会を位置づける」、「12.教

1. 教職は明朗で愉快なものである。
2. 教職は高尚な知性をもった人がするものである。
3. 教職といっても特別な職業ではない。
4. 教職は愛と奉仕を具体的に実現するものである。
5. 教職は他の知的職業と同じ種類のものである。
6. 教職は精神的満足感を与える。
7. 教職は要するに子もりにすぎない。
8. 教職は崇高な天職である。
9. 教職はそれに従事する人を若くする。
10. 教職は次の社会を位置づける。
11. 教職は子どもや親にへつらうものである。
12. 教職は少しの専門的知識を要する。
13. 教職は尊厳な公職である。
14. 教職に従事すると若さが失われる。
15. 教職は社会の隅に忘れられがちなものである。
16. 教職はじじい臭い職業である。
17. 教職は能なしがするものである。
18. 教職に従事すると世間知らずになる。
19. 教職は生活の糧を得る為の手段である。

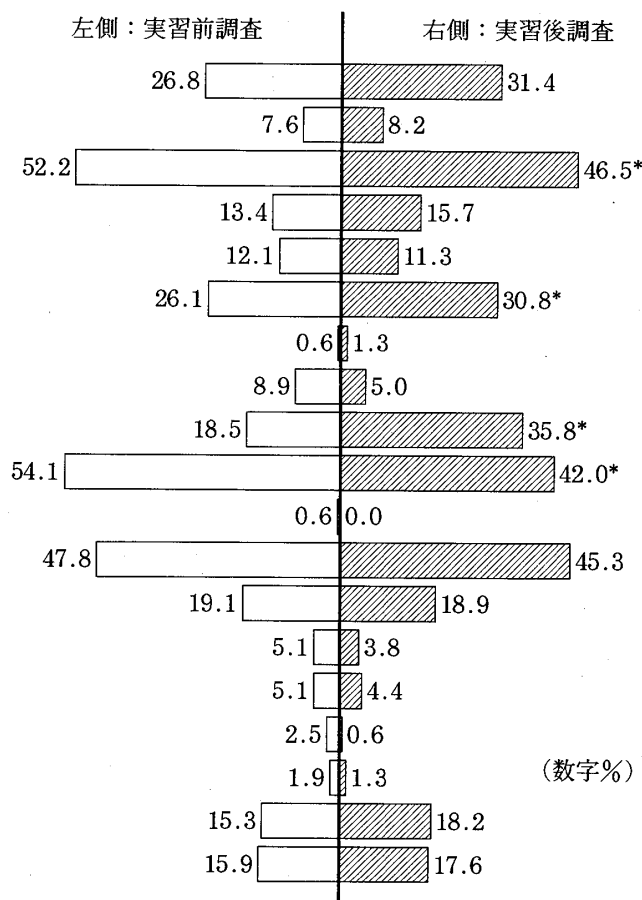


図2 教職観 (実習前後比較複数回答)

職は少しの専門知識を要する」が5割近い賛成を得ており比較的他の項目より多い。これらは学生の一般的な教職観だと考えてよいだろう。

次に教育実習前後で増減の差が比較的大きいものを取上げてみよう。

教育実習後に増加している項目は「1.教職は明朗で愉快なものである」(26.8→31.4)「6.教職は精神的満足感を与える」(26.1→30.8),「教職はそれに従事する人を若くする」(18.5→35.8)であった。他方,減少傾向にあるのが「3.教職といっても特別な職業ではない」(52.2→46.5),「教職はつぎの社会を位置づける」(54.1→42.1)である。これらはいずれもT検定による統計的に有意差が検出されている。

(4) 教育問題の解決への見とおし

いじめや不登校など現代の学校のかかえる問題は多いし,またその解決のための取り組みが各地でなされている。そこで教育実習生はこれらの教育問題についてどのように見ているのであろうか。学習不振児の学力回復,いじめの解決など6項目の教育問題の解決の見とおしについて尋ねてみた。

図3に見るように「②校則問題の解決について」「③教師の体罰の克服」は6割前後の学生が、「①学力不振児の学力回復について」、「⑥校内暴力の解決について」の2点に関しては3割~4割の学生が「見とおしは明るい」「どちらかと言えば明るい」と回答している。しかし、「④いじめの解決について」、「⑤登校拒否・不登校の解決について」は見とおしは明るいと回答している学生は2割に満たない。

また教育実習を経過することでこれらの回答率に変化が顕著に現われる項目はほとんどない。統計的に有意差が認められたのは「⑤登校拒否・不登校の解決について」のみである。

		見通しは明るい	どちらかと言えば明るい	どちらかと言えば暗い	見通しは暗い
①学力不振児の学力回復について	実習前	3.7	34.8	52.2	9.3
	実習後	2.5	35.6	48.1	13.8
②校則問題の解決について	実習前	12.3	50.0	26.6	11.1
	実習後	10.6	51.6	26.7	11.2
③教師の体罰の克服について	実習前	6.2	55.6	30.9	7.4
	実習後	7.5	50.6	30.6	11.3
④いじめの解決について	実習前	0.6	14.8	56.2	28.4
	実習後	15.4	46.9	37.7	
⑤登校拒否・登校の解決について	実習前	0.6	18.5	53.7	27.2
	実習後	1.2	11.1	54.9	32.7
⑥校内暴力の解決について	実習前	4.3	31.5	51.9	12.3
	実習後	3.7	38.5	45.3	12.4

(数字%)

図3 教育問題に対する見通しについて

る。この項目については実習後、「見とおしは暗い」と考える学生が増加していることである。このように教育問題の解決の見とおしについて、学生は実習を体験しても変わらず全般的にあまりよくないと判断しているようである。

(5) 学生の教育実習観

学生の教育実習観をそのイメージと価値意識の両面から聴いてみた。

〈教育実習のイメージは変わるか〉

教育実習のイメージをSD法を使って調査した。ただし、各項目の平均得点を算出する方法はとらず、各評定ごとの回答の比率を算出し、教育実習の前後比較をおこなった。

教育実習まえの学生の実習イメージはどちらかと言えば「①きゅうくつ (64.9)」で「②きびしい (88.9)」,そして「③不安 (84.0)」で比較的「⑥長い (56.2)」感じがし「⑤つらい (86.5)」だろうと考えている。

教育実習後は「①きゅうくつ (37.0)」さは、やや減たものの、やはりそれは「②きびしい (59.3)」ものであり「③不安 (59.3)」さを残している。

しかし教育実習は「⑥短い (71.6)」感じがしたし、しかも「⑦楽しい (71.6)」ものだ

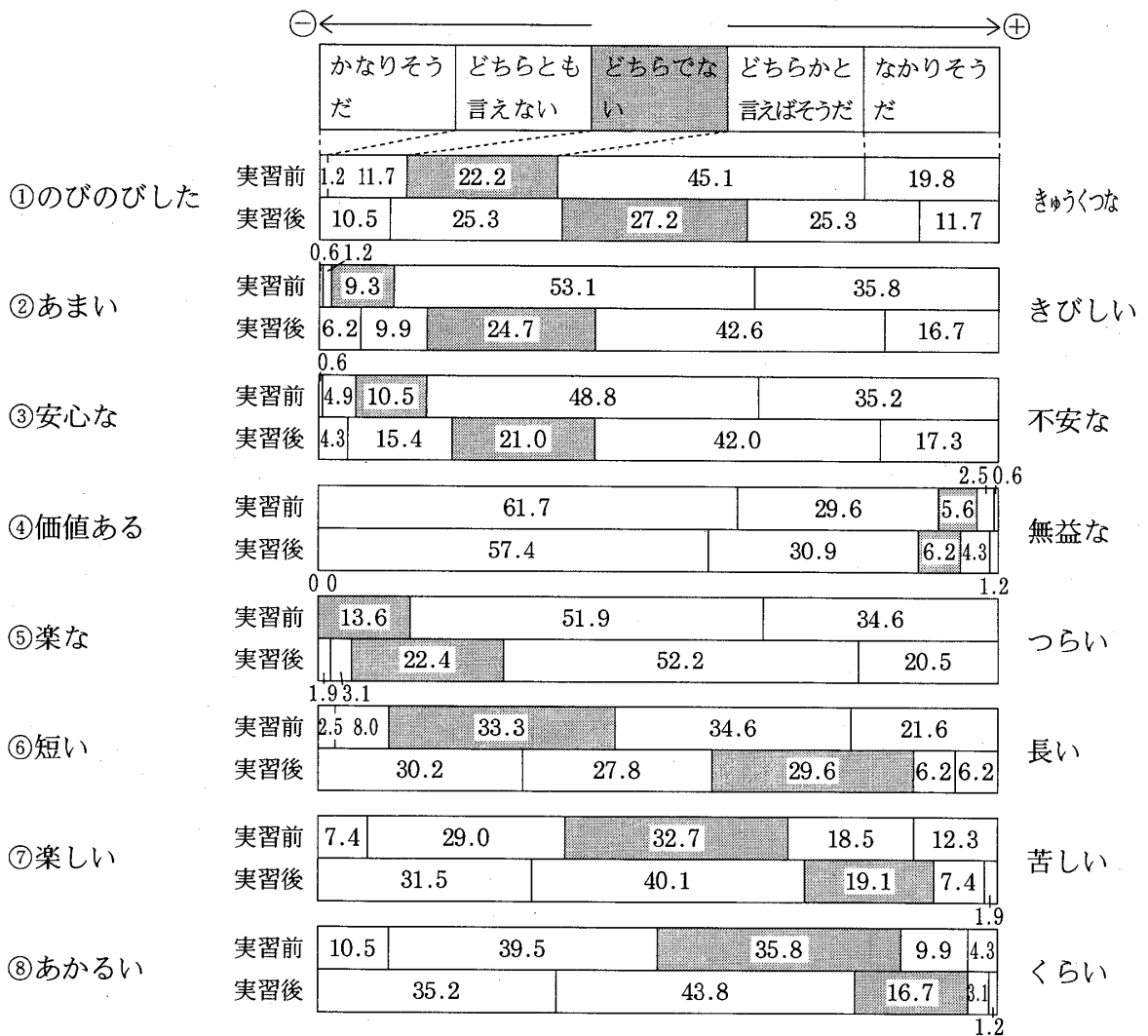


図4 教育実習イメージ (数字は%)

と実感したようである。

学生は、教育実習の前後とも実習を「④価値ある (91.3→88.3)」ものだと捉らえているようだ。

〈教育実習の意義について〉

つぎに教育実習の意義については、図4の「④価値ある」ものだとのイメージを裏付けるような結果がでていいる。教育実習の価値について5項目を設定し尋ねたが、いずれも教育実習の意義を評価する結果であった。

しかも教育実習の価値意識については実習の前後でもあまり変化しないことが特徴である。

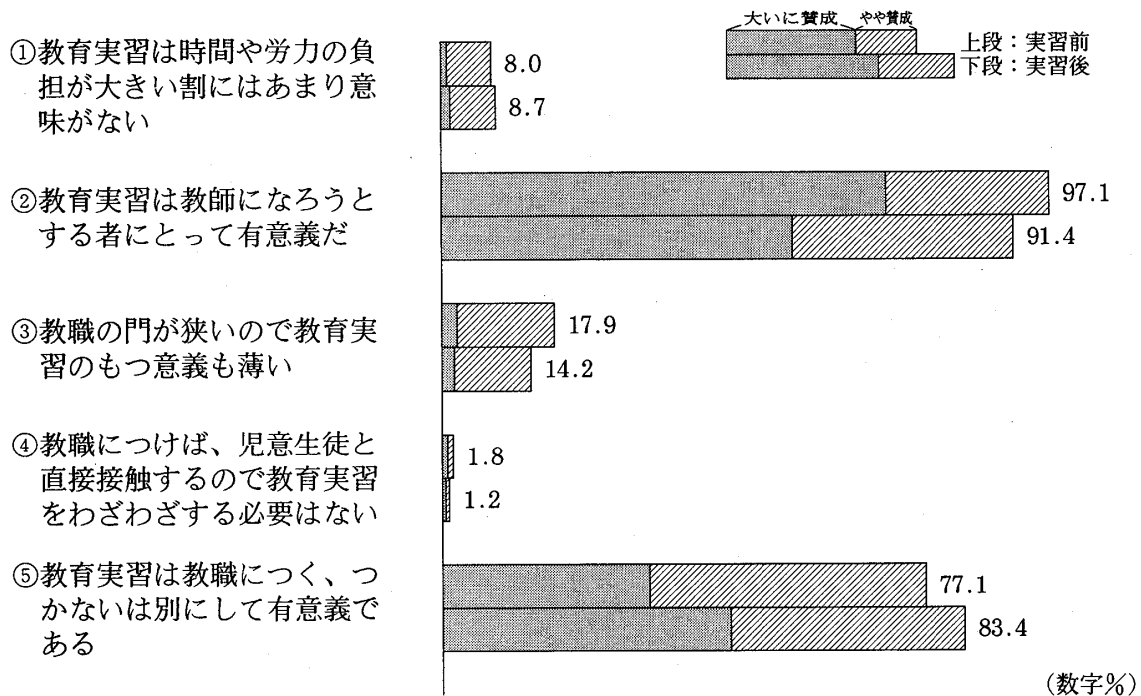


図5 教育実習に対する価値意識

(6) 授業と子どもの指導観

授業に関して、また子どもの指導について実習前後の学生の意識はどうであろうか。ここでは、授業に関して「授業は難しいと思う」「授業は準備が大切だと思う」など6項目を、子どもの指導に関しては「子どもを叱るのは難しいと思う」「子どもを褒めるのは難しいと思う」など5項目について、5段階の評価で尋ねた。

その結果は、図6にみるように、多くの学生は、授業は難しく、準備が大切であり、授業の場で子どもに発言させることや、子どもを集中させることは難しいことであるとの認識をしているようだ。しかもこの傾向は教育実習を体験した後、さらに強まるようだ。

ただし教育実習を経験した学生の3割が「③授業はその場でなんとかなると思う」と回答しているように、授業は難しいものだと考える反面、授業はその場でなんとかなるといった楽天的な者もいる。

他方、子どもの指導については、教育実習後に変化が著しいのは、「⑥子どもを叱るの

は難しい」(「かなり思う」が44.4→61.7),「㊟子どもはかわいいものだ」(「かなり思う」が37.7→61.1)で,「㊠子どもの心を引きつけるのは大変だと思う」,「㊡学級集団をまとめることは難しいと思う」という回答は教育実習の前後とも変わらず高い。

このように教育実習は学生の授業観や子どもの指導観に少なくない影響を及ぼしているようである。

3. まとめ

本研究は教育実習に関して極めて基礎的研究であるが,冒頭にのべたように研究仮説として3点を掲げている。

そこで調査結果からこれらの諸点についてはどのような結論を導くことが出来るだろうか。各仮説毎に私見を述べることでまとめとする。

① 教育実習を経験することにより学生の教育実習観,教職観に何等かの変化が見られるだろう。この点に関しては,教育実習の意義や価値意識そのものは教育実習によっては大幅に変るものでなくほぼ一定であること。しかし教育実習に対するイメージや指導観は必ず分変化する。そのことは教育実習以後のいくつかの変化によって読み取る事ができた。例えば実習体験によって教育実習のイメージは明るく,楽しいものに変化したし,子どもへの指導の難しさを実感するとともに子どもへの愛着心を高める傾向が強く現われていた。

この様な意味で教育実習は大学生活から離れ,実際の教育現場に参加することを通して大学での学習とは違った意義をもっていることが明らかになった。

② とくに教職志望意識に変化がみられるだろう。

教職志望志向に関しては教育実習参加によりより高まる学生と,教職を諦める傾向の学生とに分れる傾向がある。しかしこの傾向は他の大学ほどではないことも付加しておきたい。

③ 教育実習体験が今後の大学生活への何等かの影響をもたらすであろう。

これらについては,実習校でのアンケートからかなり明らかになってきた。そこには,教育実習をとおして得た授業観や子どもへの指導の難しさを大学での教職専門科目に生かす意欲が,自由記述の随所にみられる。

また,教育実習事後指導として一昨年からはじめた「教育実習事後シンポジウム」の学生の発言からも明らかになっている。

問題は,彼等の教職への意欲を,大学の教育といかに結合させるかといった視点からの研究の必要であり。もう一つは,教員採用試験をいかに多くの学生に合格させられるか,といった現実的な進路保障が課題となっている。

将来の就職が灰色である限り,学生の教育実習参加意欲は実習校の先生方の度量だけでは解決できないことも明らかになっている。

そのような意味で,教職免許をとるだけのペーパーティーチャーを増産するのではなく少なくとも1~2年以内には,全ての教職志望者が就職できるような進路条件の整備・充実が不可欠になっている。



図6 授業と子どもの指導観

注記

注1) マイクロティーチングを教育実習の事前指導に取入れる試みが各大学で行なわれているが、それらの効果について実証研究は十分ではない。

この点については井上光洋「マイクロティーチング研究の現状と課題(1)(2)」(東京学芸大学紀要教育科学第36,37集1985,86)参照

注2) これらの教育実習に関する基礎研究もかなりの蓄積がある。ここでは調査項目の作成との関係で、今栄国晴、清水秀美「教育実習が学生の教職志望動機に及ぼす影響」(愛知教育大学教育学部工学センター研究レポート第29号, 1993), 高旗正人,

尾上雅正「大学生の教職観に関する研究」(岡山大学教育学部附属教育実践研究指導センター教育実習研究年報第2号, 1991)を参考にした。

注3) 前掲, 高旗正人, 尾上雅正「大学生の教職観に関する研究」(岡山大学教育学部附属教育実践研究指導センター教育実習研究年報第2号, 1991) p.20

注4) 前掲 今栄国晴, 清水秀美「教育実習が学生の教職志望動機に及ぼす影響」(愛知教育大学教育工学センター研究レポート第29号, 1993) pp. 5～8